

審査の結果の要旨

氏名 関根 宏朗

本論文は、20世紀を代表する社会心理学者であり、アドルノ、ホルクハイマー、マルクーゼらと並ぶフランクフルト学派の中心的思想家であるエーリッヒ・フロム (Erich Fromm 1900-1980) の思考を対象とした、教育思想研究である。従来フロムについては、その人間的理性への信頼にもとづくヒューマニズムが近代教育学の有力な基盤として評価されてきた反面、近代教育学批判の影響が台頭した近年では、その近代的理性への信頼ゆえに歴史的役割を終えた過去の思想家としての評価も定着してきている。本論文は、そうしたいわば歴史的役割を終えた素朴なヒューマニストというフロム像の理解を刷新し、教育学分野におけるフロム研究をフロム思想が本来持っていたはずの奥行きとともに人間学的に捉え返すことを課題としている。

第Ⅰ部では、フランクフルト学派におけるフロムの位置を精神分析とマルクス主義の関係 (第一章)、マルクーゼとの論争の再考や 1960 年代のフロムの政治的関与 (第二章) を通じて明らかにし、理性と自然の対抗関係におけるフロムの前提認識を確認した。第Ⅱ部では、フロムの方法論の中心をなす自己実現の論理について、「技 (art)」と「存在 (being)」の関係 (第三章)、初期マルクスへの参照 (第四章)、教育関係における権威の問題 (第五章) に即して検討し、第Ⅰ部で確認されたフランクフルト学派的な理性と自然の対抗関係が、フロムにおいては単なる二項対立ではなく、弁証法的な「葛藤」という問題圏域において把握されていることが、それぞれの論点に即して確認された。第Ⅲ部では、第Ⅱ部で検討された自己実現の条件となる諸相が、活性化 (activating) という概念の抽出 (第六章)、活性化の具体的ありようとしての愛とケアへの着眼 (第七章)、人間・社会を考えるうえで根源的な〈悪〉の問題の検討 (第八章) を通じて解明され、理性と自然の葛藤を架橋する政治的次元が活性化という概念を基軸として浮き彫りにされた。

全体として、本論文は、公刊された著書だけでなく遺稿、対話や講演録、シンポジウム記録を含めたフロムのテキスト群を未検討の文献の読解も含めて包括的に行い、これまで分散的に展開されてきた面の強かった教育学におけるフロム研究を刷新する意義を有している。加えて、本研究では、フロムにおける理性と自然との葛藤をめぐるフランクフルト学派的な地平を、両者間の政治的位相に注目することによって、政治的な教育人間学の可能性へと開く学問的貢献を行った。これらの到達点は、フロム研究としてみれば、素朴なヒューマニストというフロム像の刷新に寄与しただけでなく、教育学においては、従来ともすれば非政治化されてきた教育人間学を政治や社会との関係のなかに位置づけ直す作業にも一定の貢献をしているといえる。以上により、本論文は、博士 (教育学) の学位を授与するにふさわしいものと判断された。